

1. た・づ・な

しんめ えま
神馬と繪馬

二〇〇四年に憶う



(財)軽種馬育成調教センター 理事 本好 茂一

日本民族と馬

わが国の馬は古く、武家社会で栄え、明治初年以來軍事に大活躍し、一気に全国的に産業として成長してまいりました。馬と人とは深い愛情で結ばれ、今日の平和な時を刻んでおります。千数百年前には、馬が神の乗物として神聖視され、神の御霊は乗馬姿で天下ると考えられていました。地域社会ではお祭りの神幸に神輿が用いられ、その頃の皇族や上層階級が生き馬を神馬として献上していましたが、常民の間では馬形や繪馬が習俗化していたようです。平安初期の地層から馬の図と思われる板片が出土し、その上部中央には紐孔があり、繪馬に間違いないと判断されています。

当時、雨乞いや日乞いのための呪術儀礼とし神馬が献上され、降雨祈願には黒毛の馬を、晴天を切望する時は白毛の馬を献上したとされています。日本人の神への信仰は神馬の献上で願いを叶えるように祈願していたのでしよう。

競馬のはじめは神事として、いまに伝わる賀茂の競べ馬がその姿を止めるもので、勝った馬が神意に通じ、吉兆をもたらすという占いであります。

馬が人類の文明の利器として働らき続けた時代から、これからの平和な時代でも、人類の宝として愛されて飼われるように願っている一人です。十四年前に馬に関する自然科学、社会科学、人文科学の面から研究発表の場として「日本ウマ科学会」を創設し、更なる馬文化の傳承のために微力を投入してまいりました。日本の近未来に馬が不要だとする時代が出現しないための防波堤となることを願っている者です。

馬よいつまでも栄えあれ

今年のアテネオリンピックの年です。一九三二年、ロサンゼルスオリンピックの大障害競技で世界一(金メダル)に輝いた、西竹一騎兵中尉と愛馬ウラヌス号を画いた海老根駿堂画伯の馬乗史絵馬をこの一文に添えて御紹介したい。

この絵は、徳川三代将軍家光により、京都三十三間堂に因んで、浅草に^{だいがらん}大伽藍を^{こんりゅう}建立し射術の稽古場の守護神として奉還した矢先の、稲荷神社の天井の日本馬乗史絵百図の一枚であります。高島邦夫宮司様の御好意ですが、ここには神武天皇以来、西中尉に至る六十人の人物と四十枚の絵が、天井に絵馬として掲げられ、日本の馬の歴史を物語っています。この絵馬に願い、馬文化の傳承を信じて、二〇〇四年の年頭に奉納いたします。

